

編集室

声を失って

ある朝起きたら、声が出なくなっていた。

前夜の送別会の途中から声が裏返ったような気がしていたのだが、それほど気にせず眠ってしまった。無理して出そうとすれば、なにやら犬の遠吠えのようなかすれた声である。そういえば、数日前から夜中に咳が止まらないことがあった。たちの悪い風邪にかかったと嘆きつつ、熱もないし、咳も治まっているので、いつもの「葛根湯」を飲んで仕事に出かけた。

私の仕事は麻酔管理である。

人様から見れば、麻酔中に喋ることはないだろうから、仕事に支障をきたすとは思われないかもしれない。私自身も密かにそう思っていた。ところが、である。自分でもこんなに声に頼っていたのかと、びっくりした。まず、朝の挨拶ができない。次いで、朝のカンファレンスで伝達事項が言えない。そして、患者さんへの術前のインフォームドコンセントがうまくできない。説明することがたくさんあるし、質問にも答えなければならない。いつも丁寧な説明を心がけていたのだが、ほとんど聞き取れないかすれ声で何とか説明しようと四苦八苦するものだから、患者さんから気の毒そうな目でみられてしまった。極め付きは電話である。こちらの声が伝わらないから、まともな会話にならなかったと思う。

翌日も全く声が出ない。さすがに焦って、良く知っている耳鼻咽喉科の先生に診察をお願いした。「声帯が腫れてますね。声門下も発赤があります。気管にも一部炎症があるかもしれない。ウィルス性のようなだから、抗生剤は効かないでしょう。腫れはステロイド内服で様子を見てもいいですが、一番の治療は喋らないことです。

いつ治るか? 分かりません。長引くかもしれませんね」先生の本当に気の毒そうな声を聞いて、私も覚悟した。治らないかもしれない!

私の勤める病院には脳心センターと育成医療センターがある。前者では脳梗塞や脳出血後の嚥下障害から誤嚥性肺炎を繰り返す人が、後者では先天性の気道の問題でやはり誤嚥を繰り返す子どもたちがいる。これらの患者さんに対して、誤嚥を起こさないようにと喉頭気管分離術が行われることがある。この手術をすると誤嚥は起こらなくなるが、いわゆる声帯を使った発声はできなくなる。そのため家族には、手術を決めるまでにずいぶん葛藤があると聞く。折しもテレビのニュースで、歌手のつんくが喉頭がんを患い、声よりも命を選びましたとのメッセージを聞いた。私にとっての声はコミュニケーションツールという意味合いが強いが、彼にとっては自己表現そのものである。本当に辛い選択だったに違いない。

あれから1ヵ月。ステロイドとアドレナリンの吸入を2週間続けて、何とか話せるようになった。でも以前の声にはまだほど遠い。まず朝起きたらすぐに「あ〜」と声を出してみる。お酒を飲み過ぎた翌朝のように、「ヴァ〜」と濁っている。腫れているのだ。しばらく話し続けると、腫れが取れたのか声が澄んでくる。しかし夕方になると再びガラッパチな声に逆戻り。疲れて声帯がむくんでいるような気がする。それでもずいぶん良くなった。今年は私にとって大凶にあたる年である。体を大事にし、心して日々を過ごさないと、こんなものでは済まないかもしれない。

(中尾三和子)

広島県医師会速報 2015年(平成27年)5月5日

- 発行所／一般社団法人 広島県医師会 〒733-8540 広島市西区観音本町一丁目1番1号 TEL 082-232-7211 FAX 082-293-3363
広島県医師会HP <http://www.hiroshima.med.or.jp/> E-mail: kouhou@hiroshima.med.or.jp
- 編集者／広島県医師会長 平松 恵一
(広報委員)山中 祐介、小園 亮次、高路 修、佐々木 達、佐々木 龍司、谷 充理、中尾 三和子、平林 直樹、
正岡 良之、吉田 良順、小笠原 英敬、水野 正晴、岩崎 泰政
- 印刷所／レタープレス株式会社 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809番地の5 TEL 082-844-7500 FAX 082-844-7800